|  |
| --- |
|  |
| 　 |
| １　施設種別 |
| 障がい者支援施設　（旧　身体障がい者療護施設） |
| ２　ねらい取組みテーマ（８）自閉症の利用者への個別支援の取組み～身体障がい者を中心とする施設における自閉症の特性に配慮した取組み～ |
| 自閉症の利用者の見通しを持った落ち着いた生活をめざすと共に、職員の障がい特性に対する専門性を深める。 |
| ３　取組みの内容 |
| ○施設の主な利用者は身体障がいの方であるが、職員が自閉症に関する外部研修を受けたことにより自閉症の方への個別支援の必要性を感じ、「障がい特性委員会」を設置し、その活動を通して自閉症の障がい特性を踏まえた個別支援を進める。○委員会において、自閉症の利用者の方への評価、スケジュール、コミュニケーションについて検討し、委員会メンバーを中心に実践し、施設全体に広げていくことをめざす。 |
| ４　取組み経過 |
| 【取組みの背景】* 自閉症の障がい特性を踏まえた支援を必要とする方が数人入所されていたが、主に身体障がいの方への介護を中心としていた施設のため、自閉症の特性に関する知識や支援について職員間で理解できていない状況があった。
* 自閉症の支援についての外部研修を受けた職員が、自閉症の方がいかに大変な状態で生活されているかに気づき、施設での個別支援（自閉症の障がい特性を踏まえた支援）の必要性を感じる。

【経過】* 平成24年度

自閉症に関する外部研修会の伝達研修を施設内で実施するが、伝達研修では職員間で自閉症に関する共通認識を持つことが難しく、障がい特性に応じた支援を行うことに限界を感じたため、委員会を設立し、委員会を中心に支援について取組み、施設全体で共有する必要性を感じる。* 平成25年度

施設長、主任と委員会の設立について話合った結果、「障がい特性委員会」を立ち上げることとなった。委員会の設置を提案した職員を委員長とし、他に3人の職員が委員となり活動を始める。委員構成は、委員長を含め男女2名ずつ、年齢も20代から50代の職員からなる。**【委員会の活動内容】*** 委員は、自閉症の障がい特性の理解を深めるため外部研修へ定期的に参加し、知識を習得しながら、利用者への実践を行う。
* 委員会は、月1回開催している。

初年度である25年度は、初めての取組みなので対象とする利用者を1名決め、委員会で集中して障がい特性に応じた支援を検討している。* 活動内容は、1か月間の対象利用者の記録の確認（日々の支援記録から行動を把握する）、対象者の方の評価（コミュニケーション方法や、理解度などの評価）、視覚支援のグッズの検討、及び作成、改善したい行動についての取組みなど試行錯誤で行う。
* 評価について

対象の利用者がどのように注意喚起（要求の伝え方、職員の呼び方）を行っているかを観察し、言葉がけの理解、絵カードの理解についてデータをとりながら実施した。また、毎日の行動を把握すると、食事や日中活動には問題ないが、活動の合間の時間帯に、「ジュースや牛乳等、他の利用者との共同の物を捨てる」「洗濯機を使い続ける」等のこだわりによる行動が出ており、他の利用者との関係上改善が必要な状況が出てしまうということがわかる。* **活動の合間の時間帯の過ごし方**

・過ごし方を明確にするため、スケジュールボードを作成する。スケジュールの理解については、委員と一緒に練習する。・家族に利用者の好きな活動を確認し、不安定な行動が目立つ時間帯に利用者が好きなことができるように考える。「ひらがなを書くこと」や「ぬりえ」などが好きなため、その活動をするために居室に机を購入することを考える。・机の購入にあたって以前新しいものが居室に入った時、利用者は自分のものではないと感じ、なかなか受け入れられなかったことがある。そこで、今回は、あらかじめ机を購入することを本人へ伝え、一緒に机を選びに行き、配達される日を前もってカレンダーで伝えておいた。その結果、新しい机が居室に入っていても嫌がることなく自分の机として喜んでノートやパズルを決った置場所へ自分で片付けていた。・余暇の過ごし方については、絵や写真を使ったスケジュールボードで予定を示し、パズル、ぬりえなど本人の好きなグッズを入れておき自分で選び活動できるように設定する。C:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\QC5KN6DB\MC900056300[1].wmfC:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\0G39EFW0\MC900311526[1].wmf【エピソード】・お風呂場において、シャンプー置き場にこだわりがあり、他の利用者が入浴している時も服を着たまま浴室に入ってきてシャンプーを置き換えるため、自分の入浴の番でないときは浴室に入らないことがご本人に伝わるように、入口に「×印」を大きく記入したボードを設置したら、それ以来上記の行動はなくなった。・浴室に入らないように制止すると利用者の調子が悪くなるため、これまでは本人のこだわりを受け入れた方が良いか、止めた方が良いのか悩んでいたが、ちょっとした工夫（入口に×印）で解決したことで、障がい特性を踏まえた支援により、困った行動が変化するという実感を持つことができた。声掛けによる制止より、視覚的に伝えた方がご本人にはわかりやすく伝わり、わかるように伝えること、工夫することの重要性を認識した。・一泊旅行に行くにあたり、本人用のしおりを作成した。次にどこに向かうかや、そこで何をするかを写真とひらがなで伝える事により、理解を示し、落ち着いて行動する事が出来た。　しかし、旅館についてから入浴までの時間が長く、また、その間のスケジュールを作成していなかったため、混乱が見られ、まだまだ配慮が足らないと痛感した出来事であった。C:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\0G39EFW0\MC900325968[1].wmf |
| ５　現状（取組み結果の状況）　 |
| 【対象利用者の様子】* スケジュールを理解して過ごすことができるようになっている。余暇時間には、「ひらがなを書く」などの活動を行っている。

【障がい特性に配慮した支援状況】* + 支援状況では、どうしても職員により障がい特性の理解に差があること、業務の大半が身体障がいの方への身体介護が中心になっているため、利用者の特性に応じた個別支援が後回しになっている現状がある。まだまだ委員会の意図が全職員に理解されていない。
	+ 自閉症の方への支援は、長いスパンで取組むことが必要であり、結果が表れにくいため、身体障がい者の介護を中心にしてきた職員には理解されにくい部分もあると考える。
	+ 現在のところ、職員全体で自閉症の特性を理解した支援が統一できているわけではないが、委員会を中心にした活動が、他の職員へも浸透し始め、行動の意味を考えるという風潮が表れている。

【委員会活動】* + 月1回の委員会の開催については、他にも委員会が活発に運営されているため、新しく発足したこの委員会の開催についてもスムーズに行うことができている。
	+ 委員会では、利用者の小さな変化も共有できており、委員会で共有できた内容を全体に広げていくようにしている。
	+ 職員全体が一つのチームとなり、自閉症の特性を理解した支援を行っていくには、まだまだ時間がかかると思われる。委員会のメンバーが燃え尽きてしまわないようにモチベーションを持ち続けられるように留意している。
 |
| ６　施設の振り返り・感想 |
| * 委員会を中心に、構造化、視覚化など自閉症の特性を理解した支援に取り組んでみた。

身体障がい者療護施設として施設が立ち上がった事もあり、身体介護の必要のない自閉症の利用者への理解が浅く、不安定な行動が見られると、単なる「迷惑行為」、「問題行動」として捉え、ただ「制止」するのみで、当然の結果として、不安定な行動を更に助長させてしまっていた。スケジュールボードを作成し、見通しを示し活動を明確にすることで、生活が安定し、少しでも充実して過ごせるようになってきていると感じている。ある時は、スケジュールに貼ってある写真を自分で持ってきて、好きな活動の要求に使用されたことがあり、コミュニケーションの広がりを感じた。委員会では、小さな変化も共有し喜びにつながっている。* 一方、委員会を立ち上げて半年以上になるが、会議の中で問題に上がってくるのが「職員間の意識の統一」である。「利用者の一人」ではなく、自閉症の障がい特性を理解し、その人の立場に立って考えなければ支援は難しいという意識を全職員で持たなければならない。しかし、叱責や放任してしまう現状があり、そこには「現場の忙しさ」や「マンツーマンの支援ができない」という問題が背景にある。
* 「結果が表れにくい」という自閉症支援だからこそ、長いスパンで観察を続けなければならないということを、職員全員で理解しなければならない。
* モチベーションを維持するためにも、これからも伝達研修等を繰り返し、自閉症支援が「本当に必要な事」であることを伝えていきたい。そして自閉症の方が、自信を持って自発的に行動している姿を全員で見てみたい。

**ポイント**・身体障がい者への介護が主な業務になっている中で、個別の障がい特性に応じた自閉症利用者への支援に取り組んだ事例である。・個別性を重視して取り組むには、それまでの業務に加えて新たに専門知識の理解、それに基づく実践、そして施設全体への共有が求められ、かなりの労力、職員のモチベーション及び技量も必要とされる。・職員の意欲を支える施設の体制、モチベーションを継続できるようチームでの意識の共有、そして小さな変化を実感する（成功体験の積み重ね）ことで次へのステップにつながる。・すぐに効果の見えるものではないが、観察、分析、検証、工夫を繰り返し、小さな変化を実感し成功体験を繰り返すことが重要である。 |



**![説明: C:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\ZUUHU4T3\MC900405972[1].wmf]()ポイント　　　委員会で記載**